

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小澤 一郎

本論文は、18世紀末から20世紀初めのガージャール朝期イランを対象として、19世紀後半に主として欧米で急激な発展をみた火器の製造と使用技術のこの地への移転の諸相を詳らかにし、それが政治動向や社会変容にどのような影響を与えたのかを論じたものである。ペルシア語の史資料群に加えて、イギリスの各種公文書を縦横に用いた実証的な論証が、本論文の大きな特色である。

全十章からなる本論文は三部に分かたれ、第一部では19世紀前半におけるイギリス政府からイランへの火器移転の経緯とその意義が、小銃、大砲と火器製造技術のそれぞれについて説明される。第二部では、19世紀半ばから後半において、欧米諸国からの火器輸入や火器製造技術の移転が、ガージャール朝正規軍の武装のあり方にいかなる影響を与えたかが論じられる。そして、第三部では、政府経由ないし政府承認という「公式」の輸入以外の様々な方法で、最新鋭の小銃が大量に地方の自立的な勢力の手に渡り、それが20世紀初頭のイラン立憲革命の展開とそれに伴う社会変容に大きな影響を与えたことが論述される。

本論文では、従来あまりよく知られていなかった火器とその製造技術のイランへの流入の事例が具体的にいくつも紹介される。イギリス人が関与してアゼルバイジャン州で鉄鉱山が開発され兵器鑄造工場が建設されたことや、露土戦争終了後に当時最新のアメリカ製小銃がオスマン朝軍から大量に流出しイランに入り込んでいたことなどは、その例である。これらは通常の「イラン史」の叙述では見逃されがちだが、当時の世界の政治や軍事の状況を全体として理解する際には無視できない要素である。このように、国際政治史や軍事史の文脈で重要な具体的な事例を数多く提示したことは、本論文の大きな功績の一つである。

本論文の論旨の展開は概して明快であり、従来、バラバラに論じられていた事象が、広い視野のもとで統合的に説明されている。一定量の最新鋭火器がいくつかのルートを経てイラン南部のバフティヤリー部族の所有するところとなり、それが19世紀末から20世紀初めにおけるこの部族の台頭につながり、さらに彼らが立憲革命において重要な役割を果たす伏線となったという本論文の論旨は、魅力的であり、十分な説得力を持つ。

むろん、本論文にも弱点はあり、審査委員会では、ガージャール朝の財政史や外交史についての説明が不足している、フランス、オーストリア、ロシア、オスマン朝などの資料をも本格的に用いるべきである、「公式」「非公式」などの用語の使用に問題があるなどの指摘があった。しかし、これらの瑕疵にもかかわらず、本論文が19世紀のイラン史と火器の世界史の従来の水準をはるかに超える質の高い研究であるという点に疑いはなく、博士(文学)の学位を授与するに十分な業績であると判断された。